

# 大森赤十字病院 消化器内科

【住所】東京都大田区中央4丁目30番11号 【病院長】中瀬 浩史 先生 【病床数】344床  
 【内視鏡検査総数】約5,000件(平成23年度)うち、  
 上部内視鏡検査3,000件、下部内視鏡検査2,000件、ERCP120件  
 【スタッフ】医師9名、看護師8名(うち内視鏡技師4名)  
 【スコープ本数】上部10本、下部6本、側視2本、EUS 側視1本、直視1本



## 新病院オープンでさらに機能を強化し 地域住民に幅広い医療の選択肢を提供

### 赤十字病院のネットワークを活かして 災害時にも機能する新病院がオープン

大森赤十字病院は、日本赤十字社東京都支部が運営する病院で、その歴史は昭和21年開設の日本赤十字社東京都支部大森診療所までさかのぼります。昨年5月には待望の新病院がオープンし、さらに今年10月に旧病院の改装を終えて晴れて全面開院となりました。新病院は免震構造を強化し、災害停電時でも3日間給油なしの自家発電だけで診療を継続可能で、CTスキャンやMRIも運用できる体制が完備されました。正面玄関脇に配置された講堂は、災害時にはトリアージスペースとして利用できるように設計されるなど、公共の福祉に寄与する災害に強い病院が誕生しました。新病院の建設には中越地震における長岡赤十字病院の経験が色濃く反映されており、赤十字病院のネットワークで現実的に有用な万全の対策が取られています。

同院の消化器内科では、長年悪性疾患の早期発見・早期治療に力を入れており、現在では消化器系の入院患者は院内全体の三分の一を占めるほど、症例数が年々増加しています。消化器内

科副部長の太原洋先生は、「以前は専門施設に紹介していたような患者様も、新病院開設後はほとんど当院で治療できるようになりました。また、従来化学療法は一泊入院もしくは日帰り入院で行っていましたが、外来化学療法室が設置されて通院で化



消化器内科副部長  
太原 洋 先生

学療法を受けていただけるようになりましたので、特に高齢の患者様の負担をかなり軽減できるのではないかと考えています。最近では、患者様ご自身が当院での治療を希望して来院されるケースも目立って増えてきています」とお話になりました。中でも、副院長兼消化器内科部長の後藤亨先生が行っている肝細胞癌に対する治療成果は高い評判を呼び、遠く神奈川西部から受診される患者様も多数いらっしゃるそうです。太原先生はさらに、「経験豊富な腫瘍病理医も常勤となったことで、内視鏡診療においてもさらに質の高い検体を求められるようになりました。癌診療に注力する施設にあって、内視鏡医と病理医が刺激し合い、技術を高め合う環境が整いつつあります」とコメントされました。

### 患者QOLを最大限に高める医療を目指し 超高齢者に対する内視鏡診療を実践

新病院開設に伴い、同院では内視鏡室のレイアウトも一新しました。内視鏡室を従来の2室から4室に拡充し、関連機器類の充実を図るとともに、患者様とスタッフの導線を完全に分離したレイアウトを考案して安全性と効率性を高めました。また、患者様のプライバシーに配慮し、検査室は完全個室化しています。

消化器内科では、腹痛や下痢などの一般的な胃腸炎から消化器癌に対する先進治療まで幅広い領域に対応していますが、消化器内科副部長の井田 智則先生は、近年、超高齢者に対するERCPなどにも積極的に取り組んでおられます。「以前は超高齢者という要因が施術をためらわせていましたが、現在では全身状態の状況

▶次ページへつづく



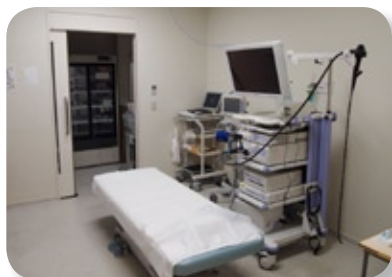
# 大森赤十字病院 消化器内科

を判断し、内視鏡が介入することがQOLの観点からメリットがあると判断されれば、超高齢者であっても内視鏡的に治療を行っています。当院は地域に根差した医療サービスの提供を心掛けており、診断の第一の窓口になるよう努めています。外科とのコンサル



消化器内科副部長  
井田 智則 先生

テーションも臨機応変に実施しながら、何が最善の選択肢かを考えて日々の診療にあたっています」とお話になる井田先生。高齢者に対する治療法の選択は、家庭環境などの要因を考慮することも重要ですが、地域密着型の医療機関であることから、ご家族への説明や相談もスムーズに行えるそうです。



新病院の内視鏡室



患者とスタッフの導線を分離



消化器内科の先生方



看護師のみなさん

## 迅速かつ効率的な人材育成のため 習熟度に応じたオーダーメイドの指導を実践

消化器内科は日本消化器病学会および日本消化器内視鏡学会の指導施設であり、学会活動や人材育成にも熱心に取り組んでいます。学会では毎年継続的に治療成績などの報告を行い、他施設の先生方との議論を通じて知識やテクニックのレベル向上に努めています。太原先生は、「部長の後藤先生が科員の学会参加や発表を奨励しているので、海外も含めて積極的に研究発表を行っています。治療内容や結果を外部に発信することは、連携する地域の病院から信頼を得るためにも必要なことですし、学会という場で新しい刺激を受けることは治療実績を積み重ねるためにも必要なことだと思っています」と説明してくださいました。

専門医の育成に関しては、指導医がマンツーマンで指導にあたり、個人の習熟度に応じて次の課題を決めるような、オーダーメイドの人材育成を行っています。あえてカリキュラム化しないことで効率的なトレーニングを実施し、結果として迅速に技術や知識の取得ができています。コメディカルスタッフに関しては、同院の看護師は外来の一部門に位置づけられているため、他部署とのローテーションで業務にあたり、患者看護における幅広い知識や経験を有しているものの、内視鏡に特化した専門性を身に着けるまでに時間を要するのが現状です。そのため消化器内科では、現在コメディカル向けの内視鏡業務の教育システムを開発中です。太原先生には、「これまではその場その場で気が付いたことを細かく指導してきましたが、コメディカルの指導体制をシステム化することで、スタッフの入れ替わりがあった際にも速やかに情報が伝達される環境を整えたい」と、現在取り組んでいる課題についても触れていただきました。